

保育内容の領域複合の有効性に関する発達研究の援用 —Vygotskian fashion のコミュニケーション理論から指導法へ—

水口 崇 信州大学学術研究院教育学系

概要

幼児教育の現状、教育課程に関する研究が少ない。また実態として、領域を複合した保育活動を展開しているが、その研究はほぼ見られない。これらの理由として、的確な学術的理論が少ないことが考えられた。そこで本研究では、領域複合の理論の検分を行うことを目的とした。具体的には領域人間関係と言葉を複合的に扱うため、発達研究が提案する理論とその妥当性の検証を行った。Tomasello (2008 / 2013) のコミュニケーションの起源に関する理論を対象とした。Vygotskian fashion や語用論によるコミュニケーションの研究は、乳幼児期の特性に適していることを論じた。身振りがコミュニケーションの起源であることは、人間も大型類人猿も同じであることを言語理論によって説明した。その上で、知らせることと共有することが、人間固有のコミュニケーションの動機であることを示した。それが人間に言語を創造させたことについて論議した。最後に、政府が提案する領域人間関係と言葉のねらいと、検分してきた理論の照合を行った。この理論が両領域のねらいを包括しており、研究のフレームとして使用に適することが明らかになった。

キーワード：乳幼児期、児童期以降、5領域、領域人間関係、領域言葉

はじめに

教育は人格の完成を目的とする。教育基本法によれば、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われる、とされている。幼児教育は、教育の端緒であると同時に、後の教育の礎となる。同法においても、その重要性が論じられている。義務教育ではないが、日本のほぼ全ての子ども達が幼児教育を享受している。保護者もその教育効果に高い関心を示している。

一方、近年の行政では幼稚園を教育、保育所を福祉と説明している。この行政上の区分と学術上の区分は必ずしも一致しない。我が国では幼稚園の監督省庁が文部科学省、保育所が厚生労働省となっている。このような行政上の区分から教育と福祉といった二分法が流布した可能性がある。また保育所は、共働きによって両親からの保育に欠ける子どもを預かる福祉施設である。この点も誤解を生みだした原因かも知れない。但し、保育という

概念の源流をたどれば、ただの福祉でないことは明白である。それは心理学者であり、教育学者でもあった倉橋惣三の提言にも示されている。明治から昭和にかけて日本の幼児教育の基礎を作った倉橋惣三は、養護と教育を以って保育としている(倉橋, 1946)。それは倉橋惣三が創設された日本保育学会の英語名からも読み取れる。英語名は『**early child care and education**』とされており、本邦で発展してきた保育という概念はやはり養護と教育であった。また、彼の保育に関する研究は、東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)の附属幼稚園をフィールドとしていた。つまり、幼稚園において保育の研究がなされてきた。以上のような理由から、本稿では幼児教育について論じながら、必要に応じて保育という用語も使用する。

幼児教育は教科に分かれていない。部分的な例外はあるが、初等教育、中等教育、高等教育においては、教科別の教育がなされている。これに対して幼児教育では領域を設定している。具体的には、健康・人間関係・環境・言葉・表現といった5領域である。幼児教育は初等教育に続く就学前教育としても位置付けられている。例えば初等教育の生活科等とは、その教育内容に親和性があり、教育課程上の接続が円滑に進められている。しかしながら、幼児教育の5領域と初等教育以降の教科は整然と対応している訳ではない。このため、幼少接続・幼少連携といった教育課程上の連結は課題の一つである。

我が国の幼少接続・幼少連携では、以下のような研究が散見される。教育課程について分析した浅野(2018)、幼稚園と小学校の円滑な連携体制について論じた町井(2019)や廣瀬・山田(2011)、それらの全般的な問題を指摘した木村(2019)である。また、保育内容と特定の教科の連続性を分析した清水・小幡(2019)、松尾(2018)、岸野・無藤(2007)等である。また、就学後の小学一年生を対象とした角谷・泉(2013)、角谷・井上(2015)もある。これらに加えて、幼少接続や幼少連携における教師の役割を論じた内藤(2017)の研究もある。希少ではあるが、幼児教育の領域に重心を置いて、小学生以降の人間関係を論じた本荘(1998)もあった。これらは、教育課程の連続性を問う研究と幼少の連携体制を問う研究に大別することができる。但し全体として、Theory Driven(理論駆動型)の研究もData Driven(データ駆動型)の研究も十分とは言えない状況にある。この理由として、教育課程に日本の独自性が反映されているため、欧米の研究知見を引用しにくいことが挙げられる。また、初期に日本で考案された保育内容を時代や社会の要請によって加筆修正してきたため、当初の理論的根拠が不明確になってきていることも考えられる。

また、保育内容は5領域から成り立っている。但し、実際の保育において、単独の領域だけが活動の目的となっていることは少ない。領域を複合した活動が展開されている。例えば、『大きなかぶ』の読み聞かせを行った後、実際に大きな白いかぶを製作するという活動を行ったとする。この場合、領域言葉と表現が綯い交ぜになっている。このような領域複合はほぼ毎日の保育で実施されている。それらは、実践や研究保育として報告される

ことはある。しかしながら、研究の俎上には乗りにくいようである。その理由として理論が不在であることが考えられる。研究の目的や方向は選択した理論によって決定づけられる。従って、理論が見当たらない場合、研究も手つかずの状態になりやすい。

そこで本研究では、領域複合の理論を検分する。具体的には領域人間関係と言葉を複合的に扱うためのフレームとその妥当性の検証である。幼少に留まらず、生涯の発達の全体を視野に入れる。そのためには、発達研究の理論が相応しいだろう。そして、二つの領域の複合の可能性についてコミュニケーションといった観点から検証する。この議論は次の一点に収束される。すなわち、言語は対人機能を前提とする（落合，1991），というテーゼである。

Vygotskian fashion について

まず、Vygotskian fashion について概説する。これは旧ソビエト連邦の心理学者、Vygotsky, L. S. による研究や思索方法である（Tomasello, 1999 / 2006）。それは系統発生（Phylogenetically）、歴史（Historically）、個体発生（Ontogenetically）といった3つの側面から人間の精神機能を解明しようとする。人間の精神機能は、膨大な時間を費やした進化の過程を経て現在に至っている。また我々は、長い歴史的時間の中で文化を創造してきた。このため、生まれ落ちたその瞬間から、文化的産物に包囲された生活が始まる。文化的産物は有形無形の様々があるが、その作成には目的が伴っている。その目的にアクセスすることによって、前世代の人々の知恵や知識を知ることができる。ただ、進化や歴史が変化させたり生み出したりした事項は、その多くが既に終焉している。ところが個体発生については、同じ時間の中で発達している子ども達を直接研究対象にできる。現代社会では科学技術の発展により、進化も歴史もより正確かつ科学的に検証可能である。よって Vygotskian fashion は以前にも増して一層、有効な研究方法になっている。

Vygotsky の研究は Wertsch (1991 / 1995) によって欧州、Cole (1996 / 2002) によって米国に広められていく。Piaget, J. の研究と理論は、多くの反証実験によって批判を受けた。特に Karmiloff-Smith (1992 / 1997) による Piaget, J. の領域普遍に関する議論は発達研究にも大きな転機をもたらした。一方、Vygotsky の見解や方法は、拡張方向に進んでいる。現在も世界中で Vygotsky の影響を受けて、研究手法を踏襲する研究者がいる。また Vygotsky の思想の解読に研究者生命を費やす者もいる。Tomasello, M も Vygotsky の影響を受けた研究者の一人である。よって、人間のコミュニケーションの起源を解明しようとする Tomasello (2008 / 2013) も系統発生、文化－歴史、個体発生といった観点から探求した成果が理論化されている。ここでは乳幼児期のみではなく、それ以降の時期のコミュニケーションの発達が含まれている。前頭葉の髓消化が完成する成人期のコミュニケーションの特徴まで論じられている。これは、冒頭で指摘したように、成人期までを単一の理論で捉え、その見通しを立てながら、乳幼児期のコミュニケーションを理解し、その

在り方を考えていく上で適していると考えられる。

語用論によるアプローチ

まず、語用論について述べる。これは言語学の一分野であり、言葉の意味は文脈によって決定する、といった立場である。一般に言語学は、音韻論、統語論、意味論、語用論に区分される。音韻論は音韻に関する議論の総称であり、統語論（及び形態論）は語と語の関係、或いは語の文法形態の変化の法則、意味論は、意味を研究する分野、語用論は文脈と言葉の意味の関係を研究する分野である。比較的新しい分野に認知言語学がある。これは Chomsky (1957 / 1963) や Chomsky (1959) によって提案された生成文法に対する生成意味論に端を発する学問であり、言語を人間の認知能力から説明する (山梨, 2000)。よって認知言語学は、語用論には含まれない (今井, 2015)。語用論は意味論の適用範囲を制限したことで知られる。そして語用論は、まだ語用論と呼ばれる以前の言語哲学や言語学から研究が開始されている。Tomasello (2008 / 2013) のコミュニケーション論は語用論の影響を受けている。そこで最初に、発話行為理論、グライス理論、新グライス派の知見を検討する。

語用論の成立の礎となったのは、発話行為理論 (Speech Act Theory) である (Austin, 1962 / 1978)。これは言語行為理論と呼ばれる場合もある。Austin は発話を 3 種類に分類した。発話行為は、何らかの言語形式を何らかの意味で発話することである。発話内行為は、発話をすることによって何らかの行為 (約束、警告、宣言など) を行うことである。そして発話媒介行為とは、発話によって相手に何らかの効果を起こすことである。以下、今井 (2015) の例と解説である。例 1) I shall remember you in my will. (遺言状に書いて君に遺産をやるよ) の発話の場合、I...will. という発話行為を行ったことになる。それによって、約束という発話内行為を行ったことになる。その結果、相手を安心させる、喜ばせる等といった発話媒介行為を行ったことになる。つまり発話は、行為を仕向けたり、ある考えを示唆したりすることが可能なのである。発話行為理論は、発話が一種の行為として機能することを明らかにした。

次に、グライス理論である。ここでは Bach (1999 / 2012) の解説と例に基づく。グライス理論は意味と伝達に関する理論であり、伝達の本質、話し手の意味と言語の意味の区別、会話の含みについて研究した。これは、哲学や認知科学に多大な影響を及ぼした。そしてこの理論は、意味論 (semantics) の範囲を限定した立役者でもある。まず、伝達の定義を精査した。それまで伝達は、他者の心的状態に意図的に影響を与える、といった不明確な定義であった。異なるタイプの言語行為 (言明、要求、謝罪など) は、話し手によって表現された命題タイプ (信頼、欲求、後悔など) によって区分が可能である。しかしながら、伝達意図は自己言及的あるいは反動的な意図の場合がある。このような意図には一連の入れ子構造の意図を含んでいない。具体的には、話し手は何かを伝達するという意図

とこの意図が認識されるようにするためのさらなる意図を持っていない。この場合、この意図が認識されるためのさらなる意図は、といった無限のループが続くことになる。

次に、話し手の意味と言語の意味の区別である。日常言語では、話し手が発する文が意味することとその文自体が意味することは常に一致しない。まず、例2) *Nature abhors a vacuum.* (自然は真空を嫌う) の場合、その文が意味する意味以外を意味している。つまり、自然は足りないものを補うといった意味である。次に、例3) *Is there a doctor in the house?* (家の中に医者がありますか) の場合、文が意味する以上のことを意味する。すなわち、医者をお願いしますといった意味である。さらには、区分が必要な場合もある。言語の意味は、標準化された話し手の意味に還元することができる。つまり、言語は思考自体が媒体ではなく、思考を伝達するヴィークルである。次の例4) *I believe that alcohol is dangerous.* (私は、アルコールは危険であると信じている) の場合、「信じている」に「知らない」ということが含意されている。また、例5) *The sky looks blue.* (空が青く見える) の場合は、本当は空が青くないかも知れないことが含意されている。加えて、例6) *I would like an apple or an orange.* (私はリンゴかオレンジがほしい) の場合、「or」が包括的な意味と同時に排他的な意味を含意するものとして使用されうる。このように、話し手の意味と言語の意味には不一致が生じる。

最後に会話の含みである。話し手は何か語ると、同時にそれ以外のことやそれ以上のことを意味することができる。また、聞き手は話し手が言っていることを文脈駆動的に推論しようとする。例6) *It was edible.* (それは食べられるものだった) の発話が、高価な夕食であった場合、聞き手はそこに含みを感じとっているかも知れない。以上のように、言葉の意味には多くの可能性が含意されている。よって、意味を必要以上に増やしてはならず、意味と使用の混同を削減させる必要があった。これが意味論から語用論を分離しようとした理由であり、意味論は範囲を限定させられた。なお、新グライス派については、基本的にグライスの見解を継承している。ただ個々の理論によって研究の進展具合は異なっている(今井, 2015)。よって詳細は特に述べない。

語用論の見解は、幼児や児童の言語能力を鑑みてもよく適合する。それは広く知られる一次的事と二次的事とを例に挙げるとわかりやすい(岡本, 1985)。一次的事とは、現実場面で使用される。また言葉と状況を加味した上で、少数の親しい人たちと使用する。主に相互の会話であり、話言葉が中心である。二次的事とは、現実を離れた場面でも使用されるため、必ずしも状況は含まれない。また不特定多数で、必ずしも親しくない人たちにも使用する。自己設計したプランで一方的に話すことも求められ、書き言葉も加わってくる。文脈を含めた言葉の理解は、一次的事ばを使用している幼児や二次的事ばの使い始めの児童にも容易である。言葉の表出も文脈が含まれていれば容易になる。このように幼児や児童になって間もない場合、コミュニケーションに関する語用論的なアプローチは有効である。

コミュニケーションの起源

Tomasello (2008 / 2013) の見解から、コミュニケーションの起源を検証する。系統発生的に進化の前の段階である大型類人猿を見てみる。結論から言えば、コミュニケーションの起源は身振りにある。音声は物理的に離れていても、聞き取ることが可能である。それは大型類人猿も同じである。構音器官やその構造は遺伝に既定されているが、情動と直結している点は、受け手の注意を向けることに適している。しかしながら表現に柔軟性が欠如しており、ほぼ自動的に発する場合すらある。身振りについては、物理的に離れていて、視野が広がっていなければ視覚によって確認が困難である。但し、個別の学習で成立可能な上、比較的表現が柔軟である。例えばゴリラの威嚇行為であるドラミング(身振り)を例とする。自らの行為が相手の注意を得ているかどうか、ドラミングであればゴリラは視覚的に確認可能である。しかしながら音声では、それを聞いたり注意を向けたりしているかどうか、確認することができない。また、ドラミングが何らかの効果をもたらしたかどうか、身振りが見える範囲にいるならば、それを視覚的に確認することも可能である。この点は、既述した発話媒介行為に似ている。つまり、ドラミングが功を奏したら、それに伴う相手の表情や態度に表れた変化を確認できる。

これはコミュニケーションの成立条件にも合致する。Clark and Marshall (1981) は、コミュニケーションが成立する条件として3つの原理を考案している。まず、コミュニケーションを行っている過程である。伝達者は相手とコミュニケーションを行っている間、注意を共有し、何らかの話題に気づかなければならない。次に、既有知識と状況である。伝達者は相手の状況に注意し、相手の状況に応じて合わせなければならない。また相手が知っていることについてある程度知っている必要がある。さらに、伝達の方法である。伝達者は伝えるために適切な方法を選択しなければならない。そして伝達者は相手が既に知っているかを判断してそれに合わせて伝達しなければならない。最後に、ターンテイキングと応答である。会話の参加者は順番の交代後、適切で関連のある貢献ができるよう他者の話に耳を傾けなければならない。身振りの場合は耳を傾けるのではなく、視覚的注意を向けることになる。これらの条件と照合しても、音声は一方的で相手の注意に配慮がないことがわかる。相手の注意を捕捉させて、相手の状況に合わせながら、適切な方法を柔軟に選択できなければ成立しない。以上のような観点からも、コミュニケーションの起源が身振りであったと推測される。それは大型の類人猿のみでなく、我々人間にとっても同様である。かつて Rousseau (1781/2007) は、言語の起源を音声や音楽に見出した。しかしながら、本来的な起源は身振りにあると言えるだろう。

コミュニケーションの動機

人間の本性を知る上で極めて有意義な研究がある。Warneken and Tomasello (2006) が行った生後14ヶ月と18ヶ月の幼児を対象とした実験である。いずれにしても生後9ヶ月

月を越えており、他者の意図を理解できる状態にあった。比較の対象は子どものチンパンジーであった。人間の大人はわざと物を落としたり、間違っ物を落としたりする。また、荷物を持っていて戸棚にぶつかったり、他のことをしながら戸棚にぶつかったりする。これに対して人間幼児は、物を取ってくれたり、物を除去してくれたり等、おおよそ初めてのやり方も含め様々な援助をしてくれる。これはチンパンジーには見られない。人間幼児は、見境の無い協力性を示す。つまり、見返りを求めることなく、大人に対して協力的なコミュニケーションを続ける。これは人間幼児の本質的特徴である。

協力は他者に向けているだけではない (Tomasello, 2008/2013)。他者は自分に対して協力的である、といった理解を持っている。例えば、何かを伝えようとするが、上手くその単語が想起されてなかったとする。この時、身振りを加えながら「えーっと」のように相手に話をしている場面を考える。これは相手が自分の伝達しようとすることに協力的と考えるためである。つまり相手が理解に協力しようとしており「わかった、〇〇でしょう」と答えてくれることを期待した行為である。相手が協力的と思っていなければ、このような行為はしない。つまり、人間は他者に対して協力的であるのみでなく、他者は自分に対して協力的であるといった認識を有する。

Tomasello (2008/2013) によれば、人間のコミュニケーションは3つの動機に支えられている。それは、共有すること、知らせること、要求することである。具体的には、他者と感情や見方を共有したいという動機を持つ。また、他者に役立つことや面白いことを知らせたり助けたりしたい、そして、自分の目標の達成を他者に助けて欲しいといった動機である。これは初期の身振りの代表格、指さし (pointing) からも原型が伺い知れる。原命令 (要求の指さし) は、助力を求める指差しである。手に取れない玩具が欲しい時、それが置いてある方を指さす身振りである。原叙述は、大人の注意を事物等に向ける指差しである。例えば、珍しい事物を見つけた時、大人に見て欲しくて事物を指さす身振りである。そして人間に育てられた大型類人猿の場合、原命令の指さしはあるが、原叙述の指差しはない。原命令はただの欲求である。これは大型類人猿でも見られる。原叙述は出来事への驚きや新奇な事物を他者に知らせたい、という動機が前提となるため、大型類人猿には使用できない。つまり大型類人猿は、自分の要求だけなのである。要求だけの人間もいる。ただそれは、人間の特徴を発揮していないだけで、発動は可能である。

人間に育てられた大型類人猿と野生の大型類人猿は異なる。Tomasello (1999/2006) で論じられているように、人間は他者の意図を推測する能力を進化の過程で身に付けている。これには前頭葉の発達、特にブローカ領野と関わっている。ただこの能力は進化に伴う生物的特徴単独では完全に発達しにくい。例えば、人間に育てられた大型類人猿は、人間に包囲されて飼育されている。人間はその大型類人猿の様子や態度を観察しながら、意図を推測してそれに応じて関わる。このような環境下で育つと、限界はあるが野生と比べて少し人間らしい特徴を示しやすくなる。無論人間の場合も同様である。生物学的特徴と

して備えているが、他者に囲まれて意図を読み取られそれに応じて関わられる生活を通して、より一層、意図を読み取る能力が発達する。なお、Tomasello (2008 / 2013) も指摘しているが、指さしの理論は世界でも極めて希少である。ただ例外的に、本邦にはやまだ (1987) の研究と理論がある。参照されたい。

人間の協力に基づくコミュニケーション

コミュニケーションの動機を見れば、人間と大型霊長類の違いは明白である。人間の動機は、既に述べたように、共有すること、知らせること、要求することである。大型類人猿の場合、仮に人間に育てられたとしても、その動機は要求のみである。このような違いは、コミュニケーションの内容にも著しい差異をもたらした。

Tomasello (1999 / 2006) は、人間のコミュニケーションを次のように論じている。まず、人間のコミュニケーションは協力に基づいている。その起源は大型類人猿の他者を志向するコミュニケーションに端を発する。従って、その志向性によって相手の注意を得ようとする。すなわち、身振りを非常に柔軟に使用し、特定の相手の注意を引き付けようとする。志向的な身振りには目的がある。具体的には、他者に何か行為をするよう要求をする。行為を直接的に要求する場合、意図運動を行う。一方、行為を間接的に要求する場合、相手の注意を引く行為を行う。そして目的を共有する。目的の共有によって身振りを理解し、自らも身振りを行う。他者も自分と同じように目的を持っていることを知り、相互に理解しようとする。このように形成される共通基盤は、格別重要である。コミュニケーションの中で、お互いに理解を深め、目的の共有が成立する。そうすると、特定の状況において互いに視線を合わせるだけで、言葉を交わさなくても一緒にその目的を達成しようとする。共通基盤はこれを容易に成立させる。但し、意図の推測ができない大型類人猿では成り立たない。

この上で、Tomasello (1999 / 2006) は、人間の協力に基づくコミュニケーションを理論化している。具体は次の通りである。人間は何層にもわたる心的状態を推察する。人間特有の社会的やり取りの中で行われると、共同注意と共同の目的が生起する。そして、共同注意と共同の目的は共通基盤を形成する。また、人間は共有志向性の3つの基本的動機を持つ。それらは、要求する(助けを要求する)、何かを知らせる(有益な情報といった形で助けを申し出る)、感情や見方を他者と共有する(共通基盤を拡張し、社会的絆を作る)といった動機である。何層にもわたる心的状態の推察にも動機がある。相互に協力し合っている、或は協力すべきいう想定と伝達意図が生起する。コミュニケーションを成功させるという共同の目標に向かって力を合わせ、その過程で実践的な推論だけではなく協力的な推論にも従事し、コミュニケーション上有意義な推論を行う。そして、言葉を使わないコミュニケーションが成立する。他者の視線をある方向に向けたり、アイコン的な身振りで他者の想像をある事物に方向づけたりする。この際にも共通基盤の共有が重要となる。

そして次第に、自然な身振りが恣意的なコミュニケーションに移行していった。他方、協力に基づかない大型類人猿のコミュニケーションは共有志向性が存在せず、他者と共同的な行為を成功させるために不可欠な共通基盤が作られない。さらに社会的な動機がない。このため、他者を助けたり、他者と何かを共有したりできない。よって、他者を協力的な行為者とみなすことができない。

ただ、人間のコミュニケーションも変化する。人間幼児は見境のない協力的コミュニケーションを行う。但し皆、いずれ大人になる。Tomasello (2008 / 2013) によれば、前頭葉が成熟してくると、相互互惠性を求めるようになる。つまり、一方的に協力するのではなく、それに対する見返りを意識するようになる。人格によって個人差はあるだろう。協力に基づくコミュニケーションスキルが原型であることは変わらない。しかしながら原型を基に、利己的、欺瞞的、競争的、個体中心的な目的のコミュニケーションスキルが形成されるようになる。中には、嘘のような非協力的行為の使用に至る場合もある。

文法を伴う言語によるコミュニケーション

言語は文化的所産である。つまり、言語は人間によって作られた産物である。既に述べたように、身振りはコミュニケーションを成立させる条件を備えている。それならば身振りだけで充分かと思われる。大型類人猿ならば、それで事足りる。何故なら、協力に基づかないコミュニケーションであり、要求でしか使用しないからである。しかしながら我々は、共有することと知らせることをコミュニケーションの動機として保有している。知らせることを全うさせるためには、身振りだけでは不十分である。体系的な統語の仕組みが必要であった。それが、人間が言語を作った動機と理由である。要求だけであれば、複雑な仕組みはいらない。正確に確実に知らせたいという動機から、人間は言語を作った。

Tomasello (2008 / 2013) によれば、知らせるための文法は、語る対象の識別化が必要であった。つまり、その場にはないものについて、指示する方法が必要であった。内容の構造化も行われた。伝達者は、示している事象や状況において、誰が誰に何をしたか統語で明示する必要があった。さらに、自らの意思や考えを表明する必要もあった。要求以外の動機があるなら、伝達者は受け手に対してどのような動機であるか、或は、自分がそれをどのように捉えているか、区別する必要がある。また、指示対象と現在の共同注意のフレームに基づいた識別もした。そのためには、複数の要素から成る構成素を使うこともあった。そして、事象内で参加者がそれぞれどのような役割を演じるか示すことにより、受け手に対して発話全体の構造化を行った。このように言語を作った理由は一重に、人間が協力的なコミュニケーションを行っており、他者に何かを知らせたいという動機を持つ存在であったからである。現在も強い影響を与え続けている Darwin (1871 / 1999) はその進化論の中で、文節言語を持つことを人間の特徴とした。ただ少なくとも、人間とそれ以外の動物の根源的な違いは、コミュニケーションの動機にあると言えよう。

保育内容との照合

保育内容の在り方は、政府によって提示される。それらの総論や各論に相当する内容は定期的に加筆修正が為される。直近では、保育所の場合、保育所保育指針解説（2018）に在り方と解説が示されている。幼稚園は幼稚園教育要領解説（2018）である。昨今、地方自治体をベースに進められている認定子ども園は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（2018）である。本研究では幼稚園を想定していることから、幼稚園教育要領解説（2018）に基づく。但し、これらは内容が重複している部分もあり、保育所や認定子ども園にも共通する。

第一に、領域人間関係である（文部科学省，2018）。まず、他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う、といった文言が掲げられている。ねらいとしては、(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。

(2) 身近な人と親しみ、関りを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。(3) 社会生活における望ましさや習慣や態度を身に付ける。以上のように示されている。

第二に、領域言葉である（文部科学省，2018）。まず、経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う、という文言が提示されている。そしてねらいは、(1) 自分の気持ちや言葉で表現する楽しさを味わう。(2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。(3) 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。このように明示されている。

双方の領域に通底する点を述べる。まず、少なくとも幼児は、見境の無い協力的なコミュニケーションを取ろうとする。そして、生後9ヶ月以降は意図の推測が可能となり、コミュニケーションに間主観的な交流が生起する。このことは、領域人間関係(2)、領域言葉(2)と(3)と関連している。また、協力的なコミュニケーションによって自己効力感が得られたなら、領域人間関係(1)も関係する。次に、人間は、他者と感情や見方を共有したいという動機を持っている。そして、他者に役立つことや面白いことを知らせたり助けたりしたいという動機も持っている。そして共有には慣習の理解が条件となっている。よって領域人間関係(3)、領域言葉(3)が関与する。大型類人猿と異なり人間は言語を作った。人間の場合、身振りと同様、コミュニケーションは知らせることが目的となっている。発話行為理論における発話媒介行為を考えれば、知らせることに成功した時には、そこに達成感が伴うだろう。これは領域人間関係(1)、領域言葉(1)と関連する。領域人間関係と言葉のねらいは、全て包含されている。よって、幼児教育の研究に適した理論と結論付けられる。

以上、保育内容の領域、人間関係と言葉は、単一の理論によって、その意義や役割を説

明可能であった。このように領域複合を説明する理論を選択したり照合したりすることによって、幼児教育における現実に即した活動を評価したり、予測したりすることが可能になるだろう。今回は領域人間関係と言葉を取り上げた。例えば領域言葉と表現、健康と環境といった複合についても重厚な理論が導入可能と考えられる。そのような理論的な研究が、より隆盛になっていくことが望まれる。それによって、幼児教育に関する良質で科学的な実証研究も一層増えていくだろう。

付 記

本研究は科学研究費補助金 (No.17K04348) の助成を受けて行われた。

文 献

- 浅野信彦 (2018). 幼少接続カリキュラムにおける「学びをつなぐ」視点 52, 63-75
- Austin, J. (1962). *How to do things with words* Oxford University Press (坂本百第 (訳) (1978). 言語と行為 大修館書店)
- Bach, K. (1999). Grais, H. Paul Pp 295-299. Roobeert, A. W. & Keil, F. C. (eds) *The MIT encyclopedia of the cognitive science* MIT Press(高梨克也 (訳) (2012). グライス, H. ポール. 中島秀之 (監訳) MIT 認知科学大辞典 共立出版)
- Chomsky, N. (1957). *Syntactic structures*. Mouton. (勇 康雄 (訳) (1963). 文法の構造. 研究社)
- Chomsky, N. (1959). Review of verbal behavior by B. F. Skinner, *Language*, 35, 26-57.
- Clark, H, & Marshall, C. R. (1981). Definite reference and mutual knowledge. Pp. 10-63. Joshi, A. K., Webber, B. L., & Sag, I. A. (eds) In *Elements of discourse understanding*, Cambridge University Press.
- Cole, M. (1996). *Cultural psychology: a once and future discipline* Harvard University Press.(天野 清 (訳) (2002). 文化心理学—発達・認知・活動への文化 - 歴史的アプローチ— 新曜社)
- Darwin, C, R. (1871). *The descent of man and selection in relation to sex*, John Murray (長谷川真理子 (訳) (1999). 人間の進化と性淘汰 文一総合出版)
- 廣瀬聡弥・山田芳明 (2011). 幼稚園と小学校の教師が持つ保育・授業観とその形成--幼小接続のための相互理解に向けて, 美作大学・美作大学短期大学部紀要, 56, 23-33
- 本荘建史 (1998). 幼児・児童期における人間関係の広がりについて: 社会性の発達と幼少連携 上越教育大学幼児教育研究, 12, 14-17
- 今井邦彦 (2015). 言語理論としての語用論 開拓社
- Karmiloff-Smith, A. (1992). *Beyond modularity: an developmental perspective on cognitive science* MIT Press (小島康次・小林好和 (訳) (1997) 人間発達の認知科学:

精神のモジュール性を超えて ミネルヴァ書房)

- 木村光男 (2019). 幼少連携における諸問題と背景 常葉大学教育学部紀要, 39, 249-258
- 岸野麻衣・無藤 隆 (2007). 幼児教育と生活科教育の特徴と相違：幼小連携に向けて 白梅学園短期大学研究年報, 12, 41-50
- 倉橋惣三 (1946). 幼児保護と幼児教育 幼児の教育, 45, 2-5.
- 厚生労働省(2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 町井富子 (2019). 幼稚園・保育所における教育と小学校教育の連携強化による「伝え合う力」の変容 文教大学教育学部紀要, 52, 137-144
- 松尾光洋 (2018). 新学習指導要領にみるスタートカリキュラムとしての生活科と求められる教師の資質に関する一考察 平安女学院大学子ども教育学部紀要, 2, 51-56
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説 フレーベル館
- 内藤由佳子 (2017). 幼小接続期における教師の指導性に関する研究 甲南女子大学研究紀要人間科学編, 53, 83-87
- 岡本夏生 (1985). ことばと発達 岩波書店
- 落合正行 (1991). コミュニケーションの発達 Pp. 179-206. (矢野喜夫・落合正行 (共著) 発達心理学への招待：人間発達の全体像を探る サイエンス社)
- Rousseau, J. J. (1781). Essai sur l'origine des langues ou il est parle de la melodie et de l'imitation musicale (小林善彦 (訳) (2007). 言語起源論—旋律及び音楽的模倣を論ず— 現代思潮新社)
- 清水邦彦・小幡 肇 (2019). 学生への指導を踏まえ、幼小接続を見据えた小学校「生活」や「算数」に向けた表現の指導法への提言：環境を通して、子どもの表現を多様な表現へと育て、小学校各教科等の特質に応じた表現へとスムーズな接続を図ることの解明と方策 文教大学教育学部紀要, 52, 91-109
- 角谷詩織・井上久祥 (2015). 小学1年生が積極的に取り組む授業の特性 上越教育大学研究紀要, 34, 101-110
- 角谷詩織・泉 真理 (2013). 小学1年生1学期の発達・適応を促進する幼児教育：上越教育大学附属幼稚園出身児童の特性に基づいて 上越教育大学研究紀要, 32, 127-136
- Tomasello, M. (1999). The cultural origin of human cognition. Harvard University Press (大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本田 啓 (訳) (2006). 心とことばの起源を探る 文化と認知. 勁草書房)
- Tomasello, M. (2008). Origins of human communication. A Bradford Book. (松井智子・岩田彩志 (訳) (2013). コミュニケーションの起源を探る. 勁草書房)
- やまだようこ (1987). ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち I 新曜社.

山梨正明 (2000). 認知言語学原理 くろしお出版

Warneken, F., & Tomasello, M. (2006). Altruistic helping in human infants and young chimpanzees *Science*, *311*, 1301-1303.

Wertsch, J. V. (1991). *Voices of the mind: a sociocultural approach to mediated action* Harvard University Press. (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村 佳世子 (訳) (1995). 心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ 福村出版)